

やつり、完全に漢民族となる。契丹人が遼と稱する時には既に支那人であり、女眞が金と稱する時には既に支那人となつて居る。清の如き、拓跋氏の如き皆然りである。何故かく同化力が強く、周囲の民族を吸収したであらうか。これには種々原因があるであらうけれども、一には人種的に周囲の民族と差違の少かつたこと、二には支那文化の性質が隣族と相異るところ多からず、例へば宗教状態の如きも所謂フェチシズムに屬し、隣族に容易に了解せられる如き有様であつたことなどに歸せられねばならぬ。もし人種が甚しく相違すれば同化することは困難であり、またその文化に於て兩者相距ること遠く、支那文化が發達して非常に抽象的のものとなれば、隣族はこれを了解することが出來ず、了解し得なければ同化することは出來ない。同化し得なければ漢族は既に滅亡したであらう。そしてかく周囲のものを吸収同化しつゝあつたから、自からは如何にしても本の境涯を脱し得なかつたのである。漢族が外族に接して之を防ぎ自からを保持するのは同化作用によつたのであり、同化を續けるには周囲の文化と自己の文化とに性質上の差を附せざることが必要であつた、また差を付けようとしても能はなかつたのである。だから文化發達の段階からいへば、原始的狀態を保ち續けて今日に至つたのである」云々と説かれた。念の爲に附け加へて置くべきことは、博士は文明の發達については所謂ポジチヴィズムの學說を認め、支那の文化もしくは文明に對する概觀としては、アウギュスト・コムトの學說を奉ぜらるラフィットの支那文明の概觀に述べてある所を紹介して適切な考であるとせられ、人智發達の階段は具體的の考方から漸次抽象的の考方に進むものであるのに、支那の文明のみはかゝる發達を追はないで、今日もなほ性質上原始階段に止まり、然もその階段に於ては極度の發達を遂げてゐるものとせられたのである。語を換へていへば、横には非常に發達を遂げたけれども、縦には一向に發